

パートナーシップで進めるまちづくり

京まち工房⁶⁶

(公財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

特集

景観・まちづくりシンポジウム

これからの地域まちづくりの担い手



京あるぎin東京2014
東京で京町家の魅力を発信!

景観・まちづくり大学
まちづくり実践塾
緑から考える京都の景観 ほか

京都市景観市民会議

京町家再生事例
本来の構造を大事に、
町家に住まうこと

<http://machi.hitomachi-kyoto.jp/>

京まち工房

66号

平成26年3月20日

編集・発行 (公財)京都市景観・まちづくりセンター

デザイン・印刷 (株)リーフ・パブリケーションズ

平成26年度 賛助会員募集

当センターは、まちづくり活動の支援、京町家の保全・再生に向けた取組などの事業を展開しております。活動趣旨にご賛同いただける個人、団体、企業を問わず、皆様の会員としてのご参加を心よりお待ちしております。

年会費(平成26年4月1日から平成27年3月31日まで)
個人 1口/5,000円 団体 1口/50,000円

特典1 ニュースレター「京まち工房」(季刊・年4回)

特典2 各種セミナー参加のご案内(随時)

特典3 当センターホームページへのバナー掲載(団体会員)

入会をご希望の方は、当センターにお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。

会費振込方法

- 銀行振込 当センターより専用振込用紙をお送りします。
- クレジットカード決済 当センターホームページからお振込みいただけます。(VISA、MasterCard、JCB)
- 当センター窓口 現金のみ受付いたします。

平成25年度は下記の皆さまから会費を納入していただきました。ご支援ありがとうございました。

賛助会員(個人)

相原 清/青木 巖/青木 義照/浅田 毅/芦田 正/足立 和康/足立 勇一/荒金 博美/安藤 丈智/居内 学/池澤 喜博/生駒 勲/石田 洋也/磯林 雅之/伊藤 真嗣/伊藤 正人/稲石 勝之/井上 豊司/井上 久明/井上 信行/井上 博史/岩崎 清/岩崎 亘男/上田 菜穂/上原 智子/江籠 義貞/江田 頼宣/江藤 修/太田 滋子/太田 卓朗/大塚 健志/大西 美和子/岡崎 篤行/小笠原 憲一/岡田 圭司/岡田 耕介/岡野 哲也/岡本 正二/岡本 秀巳/岡山 尚義/奥田 隆司/奥 美里/奥村 武也/尾崎 学/押谷 昌成/角村 直夫/笠岡 英次/加藤 健/加藤 昭/門川 信一郎/狩野 文博/川上 輝夫/川口 浩/河崎 尚志/河邊 聡/上林 研二/北岡 愛/北川 洋一/鬼頭 謙/来海 賢一/木村 忠紀/木村 真紀子/桐田 耕太郎/黒川 淳介/黒田 芳秀/桑原 尚史/原 正慶/小泉 光太郎/小嶋 新一/小西 操/小西 吉治/坂口 景章/坂田 榮一/阪部 孝彦/坂本 正寿/相良 昌世/佐竹 和男/佐藤 友彦/佐藤 七重/佐藤 洋/佐藤 友一/真田 松寿/佐野 恵一/鮫島 恵子/澤本 彰三/柴崎 孝之/柴田 肇/島田 和明/島村 哲郎/清水 博之/神谷 宗宏/杉浦 伸一/杉本 憲二/炭崎 勉/関岡 孝緒/園 孝裕/醍醐 孝典/高川 祐子/高木 勝英/高木 貴子/高木 伸人/高杉 学/高溝 良輔/高谷 和代/高谷 基彦/竹内 実/竹村 誠二/多田 英明/田中 隆/田中 晋司/田中 良男/谷口 功尚/多見 貞子/津嶋 俊郎/津田 知幸/出口 秀明/出嶋 恵理/寺島 彰/寺田 敏紀/寺田 史子/寺谷 淳/寺本 健三/富山 育子/内藤 都子/中井 健一/中川 明彦/中川 敬博/仲北 好宏/中島 吾郎/中島 弘益/中司 さゆり/中西 朗/中村 豊彦/中村 有希/中山 雅永/西澤 孝子/西澤 亨/西嶋 淳/西村 健/能谷 友章/野原 将嗣/則本 和弘/齒黒 健夫/橋本 操/畑 正一郎/早崎 真魚/林 建志/林 道弘/速水 孝治/平井 義也/平竹 洋子/吹上 裕久/福島 正俊/福林 文孝/藤村 知則/船橋 律夫/文山 達昭/古川 英志/古川 吉則/平家 直美/別府 正広/堀池 雅彦/堀 有輝子/松井 康史/松田 尚也/松田 彰/松村 互/松本 正/丸本 治/三島 時夫/溝上 省二/水口 義晴/宮川 和久/宮川 邦博/宮村 友子/宮本 日佐美/村上 真史/元持 清/羽井 太計司/八木 繁紀/山内 みどり/山内 典子/山内 比呂史/山名田 康孝/山本 一博/山本 耕治/山本 茂/山本 亘/湯浅 博央/横田 幸子/横田 政広/吉田 正晴/吉永 順子/米谷 朋恵/和田 豊志 他6名(敬称略)

賛助会員(団体)

大阪ガス株式会社近畿圏部/桂坂学区自治連合会/『京ぐらし』ネットワーク/京都駅ビル開発株式会社/公益社団法人京都市観光協会/京都市建築協定連絡協議会/京都信用金庫/一般社団法人京都府不動産コンサルティング協会/京町家居住支援者会議/株式会社ジェイアール西日本伊勢丹/修徳自治連合会/株式会社ゼロ・コーポレーション/一般社団法人相続相談センター/株式会社地域計画建築研究所/都市居住推進研究会/株式会社八清/株式会社フラットエージェンシー/平安建材株式会社/株式会社マープル/松ヶ崎自治連合会/ミサワホーム近畿株式会社京都支店/株式会社都ハウジング/有隣自治連合会/株式会社リーフ・パブリケーションズ/立命館大学地理学準備室/六原学区自治連合会/ローム株式会社(敬称略)

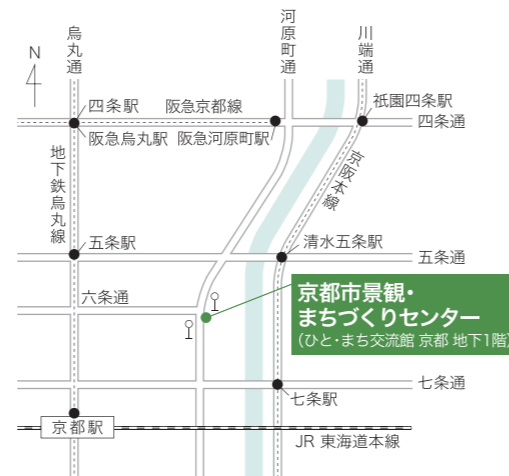
(公財)京都市景観・まちづくりセンター

〒600-8127
京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83番地の1
(河原町五条下る東側) ひと・まち交流館 京都 地下1階
TEL:075-354-8701 FAX:075-354-8704
<http://machi.hitomachi-kyoto.jp/>

開館時間
平日・土 9:00 ~ 21:30
日・祝 9:00 ~ 17:00

休館日
毎月第3火曜日(国民の祝日にあたるときは翌日)
年末年始(12月29日~1月4日)

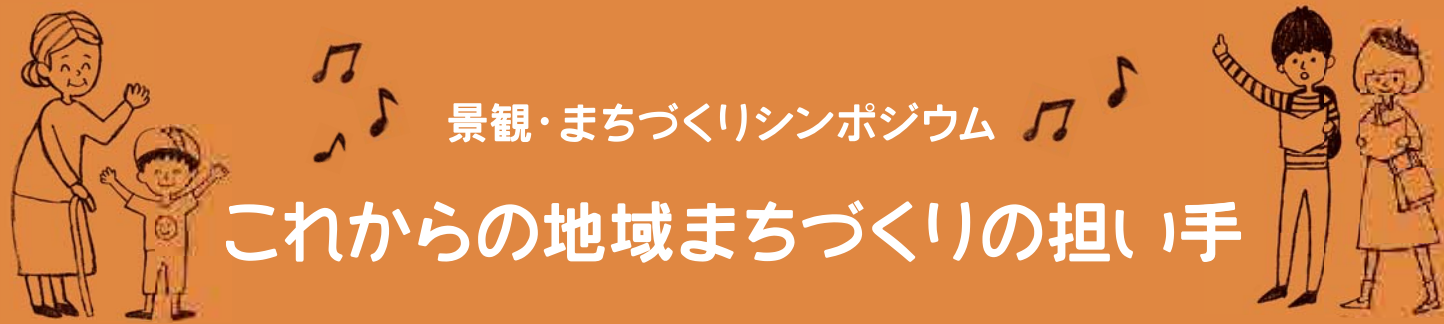
交通系統
バス 市バス4・17・205号系統「河原町正面」下車
電車 京阪電車「清水五条」下車 徒歩 8分
地下鉄烏丸線「五条」下車 徒歩10分



センターへお越しの際は公共交通機関をご利用ください。



(公財)京都市景観・まちづくりセンターは環境負荷低減に努めています。



景観・まちづくりシンポジウム

これからの地域まちづくりの担い手

2月23日に景観・まちづくりシンポジウムを開催しました。今回のテーマは、センターの原点回帰とも言える内容でした。長年にわたる地域まちづくりのリーダー、景観・まちづくりの最前線の担い手、地域における新しい活動の仕掛け人といった多彩な話題提供者による実践を踏まえた報告と意見交換が行われ、会場に詰め掛けた170人を越える人々を巻き込んだ熱い議論が交わされました。

文= 阿部麻衣子、辻真紀子、牧野杏里、杉崎和久



全体会（吉田友彦氏（左）、井上成哉氏（中左）、林正則氏（中右）、大西賢市氏（右））



分科会2の様子

全体会

■コーディネーター：吉田 友彦氏（立命館大学政策科学部教授）

■事例紹介① 井上 成哉氏（明倫まちづくり委員会前委員長）

明倫学区ではマンション問題の頻発がきっかけとなって、まちづくり委員会が設立されました。町家とマンションの共生を目指す地区計画を策定し、また「明倫マンションネットワーク」を自治連合会の中に位置づけ、マンション住民との交流に取り組まれています。

■事例紹介② 林 正則氏（紫野学区社会福祉協議会会長）

紫野学区では西陣織の不況で仕事が減り高齢化が進んでいますが、近辺に大学が多い利点を活かし、社会福祉協議会や、一人暮らしのお年寄りが学生・社会人サークルとそれぞれグループを結成し、コーラス活動やカフェ運営を行っています。

■事例紹介③ 大西 賢市氏（梅津自治会連合会会長）

梅津学区では、地域に愛着を持って住み続けて欲しいという思いがまちづくり活動の出発点となっています。住民参加のワークショップを行い改修した有栖川と構口公園で、子ども達が参加できるイベントを学生の協力を得ながら行っています。



明倫学区



紫野学区



梅津学区

議論

持続的なまちづくりに大切なポイントとして、住民が地域を再発見し横のつながりから新しいアイデアを得ること、参加者が楽しめる活動を企画することで参加者の心をとらえ、それが居場所の提供につながることで、交流できる場づくりや子ども達を対象とすることで若い人達の参加を促すこと等が挙げられました。

分科会1

コミュニティ形成に貢献する景観まちづくりの可能性

■コーディネーター：谷 亮治氏（同志社大学社会学部嘱託講師）

■事例紹介① 神戸 啓氏（先斗町まちづくり協議会副会長兼事務局長）

先斗町では、近年、花街の風情を残す町並みが失われてきましたが、派手な営業看板の改善に地域で自主的に取り組み、今では美しい通り景観が蘇つつあります。住民が自ら努力する姿と、先斗町通の道幅が狭いことから生まれる対話をしやすい距離感が、まちの課題や目標の共有と、取組への理解につながっています。



先斗町

■事例紹介② 西田 教子氏（修徳まちづくり委員会常任委員）

修徳学区では、伝統的な町家の建て替えが進み、町並みに合わない戸建て住宅の建築や、増加する新しいマンション住民との交流が課題となっています。「景観づくり相談会」では、建築計画を前向きに受け入れ、建築主と共に町並みに調和した建築を目指すほか、新住民の町内会活動への参加を後押しするなど、新住民等と地域をつなぐきっかけを作っています。



修徳学区

まとめ

景観形成を目的とした活動は、住民主体の取組により、地域の魅力を再発見し共有することにつながります。紹介された2地区の事例は、住民間の「対話」や「協議」により、一人一人が一歩を踏み出すことで景観まちづくりを推進し、コミュニティの力を鍛える場となっています。

分科会2

創造的活動空間によるにぎわい創造

■コーディネーター：阿部 大輔氏（龍谷大学政策学部准教授）

■事例紹介① 田中 裕也氏（KRP町家スタジオ、Tunagum.）

上京区にある町家を中心に、日常では出会わない人と人や、人と地域をつなぐことで、自分だけでは思いつかなかったこと、実現できなかったことを形にするサポートをしています。これまでに出会った人との交流から、商品開発ワークショップ、映画上映会、お酒を楽しむ会等を開催し、プロジェクトやビジネスが生まれる場づくりをしています。



町家スタジオ

■事例紹介② 石川 秀和氏（株式会社HLC）

もともと関心のあった古ビルの改修・再生を業としており、五条界限においても「つくるビル」など若手クリエイターの活動拠点を生み出してきました。また元々入居者のために企画した地域との交流イベントが、近所からも賛同を得られ、今では地域の若者と定期的に活動するまでに至るなど、活動範囲がまちへと広がっています。



のきさき市

■事例紹介③ 吉田 瑞希氏（京都造形芸術大学・まか通）

まか通^{*}では、六原学区の文化・風習を地域の方に再発見してもらうため、学生が地域でフィールドワークを行い、月一回のイベントを企画しています。また、学区内の空き家に実際に居住し、地域との密な関係づくりに努めながら、地域から得られた新たな学びと発見を制作につなげています。

*まか通：京都造形芸術大学の学生によるプロジェクトチーム
2004年から東山区六原学区で継続的に活動している

まとめ

共通する特徴として、活動がそれを仕掛ける人と許す人（オーナー、住民等）によって支えられていること、放置されていた空間を再生し拠点としていること、IT、アートなどターゲットを絞ることで、活動に個性や強さが生まれることが挙げられました。まずはファンになって活動を支えてくれる人を増やし、活動を仕掛ける人を応援する新しいクライアントを開拓していくことの重要性も語られました。



まか通

まとめの議論

2つの分科会報告のあと、3人のコーディネーターによる議論が行われました。まず地域の担い手として、「昔から地域に住んでいる人」、「新たに地域に入ってきた人」、「地域に関心があって活動をしている人」が示されました。それぞれの役割については、「“百人が一歩”を踏み出すための環境をつくるリーダー」、「活動をしかける人を“許している人”」の存在の重要性が指摘されました。そして地域まちづくりでは担い手に加えて、担い手を見つけ出す人、アイデアを出す人など、きっかけづくりやつなぐ役割をはたす「つなぎ手」の存在が必要であることも確認されました。



「京あるきin東京2014 -恋する京都ウィークス-」とは
京都市が取り組む「国家戦略としての京都創生」を理解・応援していただくためのイベントです。平成26年2月、東京都内の各所で、京都にゆかりのある企業や大学、団体が、京都の歴史、景観、文化芸術、伝統産業、観光など、多彩で奥深い京都の魅力を発信する様々なイベントを実施しました。

京都創生連続講座in東京 京町家シンポジウム

「智恵の継承 京町家の再生を通して」

京都で脈々と続く歴史を背負った西村氏、日本、香港で金融業に携わり、京都に第二の住まいを構えられたアメリカ出身のアラード氏をパネリストに迎え、京町家の再生を通して、何を引き継ぐべきかを議論し、形と心、それを伝える智恵について検証されました。



■パネリスト
西村 吉右衛門氏 ちおん舎 会主
アラード・チャールズ・ジュニア氏
ウイントン・キャピタル・アジア<香港>
代表取締役社長

■コーディネーター
小島 富佐江氏
特定非営利活動法人
京町家再生研究会 理事長



会場の様子

なぜ京町家なのか? 「古い」=NEW」

アラード氏が京町家の再生「リユース」に着目したきっかけは、避暑地として有名なメルビル著「白鯨」の舞台、アメリカのナンタケット島の歴史的建造物の再生でした。1832年建造のドリームランド劇場は、ホテル、教会、帽子工場、スケート場、映画館等を経て多目的ホールに活用されました。ナンタケット島では伝統の風景を守るため、デザイン規制を設け、タウンミーティングで改修案は承認される必要があり、市民の力で1800年代の風景を今に伝えているそうです。アラード氏は、日本でのご縁を大切に恩返しをとの思いと、いつ来ても飽きない京都に魅力を感じ、西陣の町家を第二の住まいとしました。織屋建ての京町家を見て、住宅への「リユース」を発想されました。改修案をご家族や建築家の内田康博氏(京町家再生研究会)と相談し、古い建具や木材を生かして理想の空間へ創りあげることの喜び、まさに「古い」=NEW」を実感されました。また、「リユース」には経済効果もあるとのこと。アラード邸では、土間に床暖房を入れて床と同じ発想で使い、かつては下駄に履き替え段差を不便に感じる空間とされていた土間が新しい機能を発揮しています。小島氏からは、このように古い物の形を残しながら新機能を取り入れる柔軟さが新しい気づきを生むことについてご紹介されました。

※シンポジウムの開催にあたり、ワールド・モニュメント財団(米国)からご支援をいただきました。

【日時】平成26年2月7日(金)18:30~20:30 【会場】野村コンファレンスプラザ日本橋6階大ホール
【主催】京都創生推進フォーラム、京都市、特定非営利活動法人 京町家再生研究会、(公財)京都市景観・まちづくりセンター
【後援】ワールド・モニュメント財団 【協力】野村コンファレンスプラザ日本橋

京都の中心で460年、「温故知新」

京都の三条室町に460年、平安京を築くために奈良から京都へ来られた西村家は1200年の歴史を有します。千吉株式会社の事業を整理された後、実家を温故知新という言葉から「ちおん舎」と名付けて活用し10年を迎えられました。大型の大塀造りの町家には大広間や茶室があり、茶事、コンサート、講演会等、多目的に利用され、人が集う場となりました。西村氏は人が来ることによって家が喜ぶようで、長年、西村家を守られたご先祖の徳、場の力を感じるようなご縁を数々実感されています。また、京町家暮らしでの不便、非効率に思えることも、バランスを考え、皆で智恵を出して楽しむ時代かもしれないとお考えです。小島氏は、「ちおん舎」の活動が大型町家をどう使いこなしていくかという課題を解くヒントになると述べられました。

次世代のためのまちづくりへ

形としての町家を見つても、中にあるものをどう伝えていくかという視点が世界共通に大切であり、そして、京都は外の力を取り込んで活性化していく都市であることがお二人のお話からも窺えました。

最後に、京都の歴史を繋ぎ、次世代へ継承するための手立ては何なのかをご提案いただきました。アラード氏は子供が安全に楽しく暮らせるまちを創りたいと考え、京都の公園に遊具を寄附されています。また、ユダヤ教の言葉「世を直す」を引用され、一人一人が諦めずに努力することが大切であり、ご自身は近所の一角が良くなれば十分だという思いで活動しているとお話されました。西村氏は300年前の家訓に人の心が残っているように、心にあることを言葉にすることも大事と考えられています。また、「ちおん舎」では食をきっかけとした質の高いコミュニケーションを生むことなど、人の多様性を活かした関係づくりに貢献したいとお話されました。

セミナー

「京町家に息づく心豊かな暮らし」

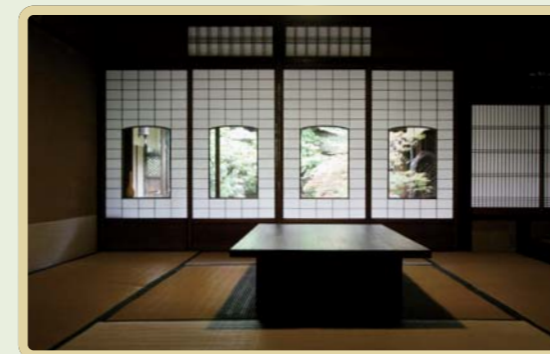
京町家の魅力に触れていただくセミナーを開催しました。講師の秦めぐみ氏より、四季折々の秦家住宅の日々、暮らしを体験する子供たちの生き生きとした様子などを紹介いただき、京町家に息づく普遍的な価値観とは何かを考えました。



■講師
秦 めぐみ氏 秦家住宅

秦家住宅について

秦家住宅(1869年上棟)は祇園祭山鉾「太子山」を出すお町内に位置し、江戸時代から小児薬「奇應丸」を製造してきた商家であること、表屋造りの空間構成と用途によって使い分けられた玄関、座敷、格子、縁側など、京町家の特徴を説明されました。庭には季節の移り変わりを伝える暮らしのサインがあり、夏には重要な風通しをもたらします。日々、自然の中で虫や小鳥たちによるドラマが展開され、庭は眺めるものというより、日常の暮らしのリズムと一緒に歩む大切な存在だそうです。また、祇園祭の折、室礼も一変し、夜には格子越しに奥が垣間見え、外から見られるという非日常を楽しむかのように、思っきり遊ぶハレの時となるとのこと。そして、マンションをはじめお町内の方々もお祭りの運営を手伝い、コミュニティの繋がりが一気に強まるそうです。かつては家々に提灯が立てられ、軒が連なっていた祇園祭の風景のご記憶から、現代的なビルでも協調性をもって軒を連ねる工夫ができればと希望されました。また、京町家と公道の間には軒のように個と公を繋ぐ中間領域があります。



秦家座敷



秦家建具替え

京町家から未来を見つめる

秦家住宅の公開から20年、「家が喜ぶ活用の仕方とは何か」を常に考えておられます。季節の移り変わりを取り込む京町家の習慣を通して、都市生活に必要な町、人、モノを合理的に繋げていた仕組みを見つめ直し、その知恵を次世代に伝えることが、現存している京町家の現代的な価値となること。そして、これから京町家の活用を考えている外からの方々と、一緒に価値を共有していく動きを活発化できればと期待されています。



会場の様子

暮らしを創る喜びを伝える

歳時によるメリハリのある生活、暮らしを創る喜びを伝えるには、現場で体験し、空間に入っていたいただくことが一番の近道であり、その空間は現代に生きている必要があると説かれました。京町家に息づいている営みの空気感を感じることが、現代のライフスタイルを見つめ直すきっかけになるのではないかと、そして、多くの世代に伝えるには「感動、驚き、楽しさ」が欠かせないと、親子会、秦家サロンなどの経験を通して話されました。また、観光資源として脚光を浴びる一方、生きることに根ざした京町家の価値観を伝えることが、今後は大事であるとお考えです。

最後に、この日、45年ぶりの大雪となった東京にて、雪の日の情緒ある秦家の外観、唐紙に反射した柔らかな光、中庭の棕櫚竹が雪で重たそうな姿などを紹介されました。

参加者からは数々のご質問があり、「毎日、掃除の時間はどれくらい掛かりますか?」との問いに、「毎日いたしません。」との秦氏のお答えには、ほっとしたような笑いが起こり、和やかな空気に包まれました。

【日時】平成26年2月8日(土)14:00~15:30 【会場】東海東京証券株式会社東京本部6階ホール
【主催】(公財)京都市景観・まちづくりセンター、京都市 【協力】東海東京証券株式会社

京のまちづくり史セミナー

都市史の中でも、特に住民の自立した活動としてのまちづくりの変遷を学ぶ講座です。

2013 11/29 fri 夜の回
2013 11/30 sat 朝の回

京都の朝と夜:生活の場としての先斗町

講師:小出 祐子氏(京都美術工芸大学専任講師)
講師:神戸 啓氏(先斗町まちづくり協議会副会長兼事務局長)

講義で特に興味深かったのは、昔、先斗町通と鴨川の間には川と併走する幅三間半の道があり、明治期以降に府から市へ払い下げられ借地となったことで、そこに離れが増築されていったという点でした。その結果、先斗町通から鴨川へ至る敷地奥の方向に複数棟の建物が連なり、通り側と川側で建物の表情が異なるという、上空から見て初めて分かる近代期の変化をご紹介いただきました。

講義の後は現地へ向かい、先斗町らしさを形作る建築の特徴を探しつつ、町家内部の見学を行いました。翌日朝には先斗町の建物群を鴨川側から見て、敷地より低い位置にあった幅三間半の道の名残が外観から推察できることなどご説明いただきました。また先斗町と木屋町をつなぐ路地にも入り、お茶屋への仕出しを生業とする人々に賑わった過去の情景を想像するなど、朝夜の違いを楽しみながら、生活の場としての京都の街を体感していただきました。

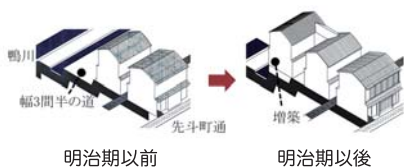


図:神戸啓氏



小出祐子氏



先斗町の朝と夜

街並みの和と洋:現代京都の二度の転機

講師:石田 潤一郎氏(京都工芸繊維大学大学院教授)

昭和初期以降の京都の街並みの変容について、ご自身の実感も交えてお話いただきました。洋風建築の増加を歓迎する雰囲気もあった大正期を経て、京都の街並みの最初の転機は、高層建築の出現、洋風住宅の普及が起こった1920~30年代でした。ライフスタイルの欧米化という生活文化面での大きな変革もあり、当時の言説からは京都の変貌に危機感を覚えるほどの衝撃があった様子がみられました。

その後「歴史性」と「現代化」の対立に答えが出ないまま「周縁部は保存、都心部は開発」という地域分化が進められ、戦後には「歴史的蓄積の厚みを持った現代都市」という複雑さが京都の個性となりました。それでも市街の大半は町家で占められ、「歴史性」と「現代性」の調和が信じられていました。70年代までは、都心部であっても幹線街路沿い以外は中層ビルが大半であったために、高度規制は緩いまでした。その結果80年代には、市街地ではマンション化によって、本来「地」であった町家が「凶」となる反転現象が起こり、それが京都の景観における二度目の転機になったとのことでした。



文=牧野杏里

京町家再生セミナー

京町家に関する基本をさまざまな視点から学びます。

「京町家まちづくりを解く」講師:宗田 好史氏(京都府立大学大学院教授)

京町家再生の取組が始まってから約20年が経ち、近年では町家レストランや宿など活用が多様化し、京町家がますます注目されています。セミナーでは、改めて京町家再生の意味について考えました。京町家の文化財・歴史的景観としての価値を守ることに以上、大事にすべきは、四季を愛でる暮らしや洗練されたしつらえなど、京町家の暮らしに凝縮される「美意識」です。

町家暮らしの生活文化を守るために、より一層個々の所有者の思いに焦点を当て、町家の価値を改めて認識してもらうことや、核家族化により家と家族の将来を考えにくくなり、町家の承継が困難になっている状況を踏まえた対策が必要であるというお話がありました。

2013 10/31 thu



「京町家を、京都の景観を、次の世代に引き継ぐための基礎知識」

講師:石田 光曠氏(司法書士、京都まちづくり承継研究会)、磯林 恵介氏(税理士、京都まちづくり承継研究会)

第一回 2013 11/21 thu
第二回 2014 1/23 thu
景観が壊れていく大きな要因の一つに「相続」という問題があります。職住一体の場として引き継がれてきた京町家が、家業の廃業により適切な承継者を失ったり、核家族化により親の家を住み継がない子供が増え、遺産分割がドライになり、あるいは長期放置されることで権利関係が空洞化し、意思ある管理ができなくなることが、取り壊しや危険家屋の一因となっています。日本は諸外国に比べ、不動産所有権に対する制限が小さく、京町家を次の世代にうまく引き継げるかどうかは、所有者個人の相続に対する正しい知識と対策にかかっているというお話がありました。



磯林恵介氏(左)、石田光曠氏(右)

本来分けられない財産である不動産の権利分散(無意味な共有)を避け、京町家として引き継いでくれる第三者を含めた適切な人に承継する必要があります。所有者は遺言書などで意思をしっかりと残すこと、また、税金面では相続税対策を優先させず、残すべき資産に優先順位をつけ、その上で適切な承継者をイメージしてから対策をすすめる必要があることを学びました。

「京都の歴史的なまちなみを地震・火災から護り抜くために」

講師:北後 明彦氏(神戸大学都市安全研究センター教授)、田村 佳英氏、武田 真理子氏(関西木造住文化研究会(KARTH))
会場:西陣ヒコバエノ家(京町家の防火・耐震改修事例)

木造建築が多い京都は、大地震後の2次災害として火災が発生した場合に市街地に火災が拡大する恐れがあります。セミナーでは対策として、地震時の同時多発火災を減らすために「石油類などの危険物の適切な管理」「電気・ガスの緊急遮断、火気器具の改良」「市民による消火活動の実施」が必要であることと、燃えにくい市街地にするために「個々の建物の防火措置レベルの向上」「建物の倒壊防止(消火活動アクセス確保のため)」が必要であることを、過去の地震被害の実態を通じて学びました。また、暮らしやすさの向上とともに住まいの安全性を高めるために、リフォーム等の機会に併せてできる具体的な防火・耐震補強の方法について解説していただきました。



「京町家の維持管理・修繕のポイント」

講師:狩野 文博氏、田原 利晃氏、堀 榮二氏(京都府建築工業協同組合)

セミナーでは実際の修繕現場の写真を見ながら、大工さんから京町家の維持管理について学びました。木造の建物は湿気を特に嫌うため、雨漏りや古くなった配水管からの漏れなどに注意し、風通しを良くすることが大切です。また、柱や壁をボード等で覆う改修は避けて劣化を見逃さないようにし、年に一度は畳を上げて床下の腐食・白蟻等を確認するなど定期的に点検し、傷んだところは部分的に修繕することで、長く住み続けることができます。参加者からは維持管理に関する質疑が多く寄せられ、講師の大工さんが丁寧に答えてくださいました。

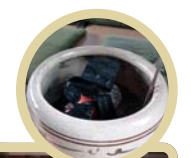


田原利晃氏(左)、狩野文博氏(中)、堀榮二氏(右)

「冬の寒さを楽しむ-火鉢編-」

お話:久保 常次氏(北区雲ヶ畑在住・林業家) / 会場:東山区弓矢町町家「弓箭閣」

かつて、山間集落で生産される薪や炭は、まちの暮らしと村の経済を支えてきました。鴨川の源流の集落、雲ヶ畑では、今も薪炭が生活の中で使われています。セミナーでは、薪炭の活用や林業の振興が森林の保全につながるというお話を聞き、雲ヶ畑の炭を用いた火鉢を囲みながら、参加者同士が交流を深める機会となりました。



文=辻真紀子



まちづくり実践塾

今年度は「景観」をテーマとして、京都の景観を形づくってきた自然や営み、また夜の景観や市民・企業との協働事例について学び、京都の景観まちづくりの可能性を広げます。

2013

11/17
SUN

緑から考える京都の景観

講師：高田 研一氏(森林再生支援センター常務理事)

景観講座の第4回目では、京都の市街地景観を「緑のあり方」という視点から考えました。はじめに、地域固有の歴史的・伝統的景観についての考え方や、自然の不規則性を活かした緑の配置・技術についてお話いただきました。その後、清水五条から六道珍皇寺周辺でフィールドワークを行い、河川敷の樹木や街路樹、道の連続性について解説いただきました。最後に、京都らしい町中の緑や道についてのワークショップを行い、建築や造園、まちづくりの実践者を目指す参加者の皆さんから、路地のある町並みや五条通の課題についての意見が出ました。



2013

12/5
THU

京都の夜景を考える

講師：村上 幸三郎氏(村上デザイン事務所代表)

第5回目は、夜の景観と照明の役割についてお話いただきました。都市の照明には、夜の快適な都市環境を演出し、通行の安全性を支える役割があります。歩行空間の照明環境を安全で快適なものにするためには、路面の状況や他者の挙動が見える明るさが連続していることに加えて、まぶしさや照明対象範囲外を照らす漏れ光の対策が必要です。また照明には意図的な演出効果があり、明るくすることで対象を良く見せたり、昼とは異なる表情を引き出して、対象の個性を際立たせたりすることが可能です。最後に夜間景観の創出事例として、東山散策路の夜景演出や御池通の照明計画についてご紹介いただきました。



2014

1/17
FRI

小さな広場から始まるまちづくり

講師：武田 史朗氏(立命館大学准教授)

第6回目は、屋外の活動の場や居場所になる広場について、お話いただきました。広場が活用されるためには利用者の参画が重要と言われますが、都市公園の場合、行政が設置・維持管理するものという性質から、利用者が能動的な運営を行うには様々な障壁があります。能動的な運営事例として、子供たちが遊びを発見できる冒険遊び場や、コーヒショップが組み込まれているなど店舗と一体的に活用されているアメリカの公園、京都市内のちびっこひろばの事例とそこでのイベント実施例などをご紹介いただきました。



最後に、ちびっこひろばの土地所有者の方に活動内容や感想を伺い、広場活用の可能性について意見交換を行いました。

*冒険遊び場：デンマークで最初に提案された、子供たちが水や土、木などの自然素材を使って、自分のやってみたいことを実現していく遊び場。

文＝阿部麻衣子

今後の開催予定

京のまちづくり史セミナー 5/26(月) 18:30~20:30 「まちの中の町家、町家から見たまち」
6/10(火) 18:30~20:30 「秀吉の大改造：マクロとミクロ」

京町家再生セミナー 4/23(水) 19:00~21:00 「京町家と京のまちづくり」
5/10(土) 13:30~16:30 「春秋・町家見学会(春の回) 生谷家住宅主屋」
6/4(水) 19:00~21:00 「京町家を地震から守るために」
6/21(土) 14:00~16:30 「大工さんに聞く、町家のキホン」

〈申し込み方法〉

①セミナー名 ②開催日 ③氏名(ふりがな) ④電話番号 以上を明記の上、電話・FAX・E-mailにて京都府景観・まちづくりセンターまでお申し込みください。

未来の「京都」を創るために ～今、取り組む「地域景観づくり」～

去る2月9日、京都市景観市民会議が下京区役所で開催されました。京都の景観政策を検証するプロセスの一環として京都市が主催し、景観づくりに取り組んでいる地域の方々や専門家、事業者、NPOなど多様な立場の市民が集い、景観政策のあり方などについて話し合おうという公開ワークショップです。

詳細な内容については、主催である京都市の報告等にお任せするとして、感想をひとつ。

地域景観づくり協議会制度(京まち工房60、63号参照)の認定を受けた5地域と、これを目指している5地域が集まったのですが、多くの地域がその運用の難しさに直面しているようでした。この制度は建築行為等が行われる場合、建築主に地域との事前協議を義務付けるものですが、法的強制力のあるルールを持たないこともあり、協議はなかなか難しいものです。建築主との良好な関係をうまく作れないと、協議の度に関係の悪化した存在を地域に取り込んでいくことになりかねません。でも、関係づくりがうまくいけば、協議は地域らしい景観を皆で考えあう場となり、景観づくりの土壌となる地域の文化を育てることにつながっていきます。

地域自身が景観づくりの土壌となるコミュニティと文化をどう育てていくかと同時に、行政が景観基準への適合を求める規制という枠組みを広げ、地域の文化とどう向き合っていくかが、今後の大きな課題だと感じました。こうした視点ももって、当センターも専門家のネットワークと一緒に、地域を理解し支援していけたらと考えます。

文＝森川宏剛



テーブルワークの様子

まちづくりの最前線から声を届けたい

FM放送 京都三条ラジオカフェ
「まちづくりチョビット推進室」

放送時間

毎月
第3・4土曜日
15:30~16:00
第3・4日曜日
10:30~11:00

当センターでは、平成21年度から、NPO法人京都コミュニティ放送による京都三条ラジオカフェ(FM79.7MHz <http://live.ptw.cc/>)の放送番組「まちづくりチョビット推進室」と協働で、主に京都のまちづくりをテーマに番組を放送しています。パーソナリティの絹川雅則さんの軽妙な語り口に合わせて、個性豊かなゲストの方々からまちの「今」を語っていただいています!ぜひ一度、お聴きください!

文＝辻 真紀子



<6月放送>ゲスト:HAPSの皆さん、絹川さん、当センタースタッフ

「まちづくりチョビット推進室」は、今年で開設10周年を迎えました。謹んでお祝い申し上げます。

今年度放送した内容

(※番組タイトルは一部省略しています)

放送月	内容
第1回 6月	「HAPSさんてご存知ですか？」 芦立 さやか氏 (HAPS 東山アーティスト・プレイズメント・サービス実行委員会ディレクター) 毛原 大樹氏 (ラジオ愛好家・アーティスト)
第2回 8月	「災害は我が事。まずは死なない、怪我しない。」 太田 興氏 (防災寺子屋・京都代表、朱八地域自主防災会専門協力員、太田福友禅(株) 代表取締役) 足立 勇一氏 (京都市中京区役所)
第3回 9月	「修徳まちなみ文化財ってご存知ですか？」 篁 正康氏 (京都府建築士会まちづくり委員会) 田中 直輔氏 (修徳まちなみ文化財選定会議、(株)田中直染料店 代表取締役)
第4回 11月	「京都の弱点を逆手に取る」 魚谷 繁礼氏 (魚谷繁礼建築研究所代表)
第5回 12月	「姉小路界隈がすごい!!」 谷口 親平氏 (姉小路界隈を考える会事務局長)
第6回 2月	「京都銭湯部ってご存知ですか？」 吉田 玲奈氏 (京都銭湯部部长、京都建築専門学校非常勤講師、日暮手傳舎代表)

*過去の放送分は、インターネットでもお楽しみいただけます。
<http://www.kohsei-const.co.jp/chobitto/chobitto.html>

京町家再生事例

平成25年度 京町家まちづくりファンド 改修助成事業

京町家カルテ作成物件

宮岡邸「本来の構造を大事に、町家に住まうこと」



改修前



改修後



改修前の内部



改修中の火袋



改修後の火袋



京町家まちづくりファンドは、京都の暮らしの文化、空間の文化、まちづくりの文化を象徴する京町家の再生を支援しています。

京町家カルテ

京町家を次世代に適切に継承していく手かかりとするために、京町家の価値を「基礎情報」、「文化情報」、「建物情報」、「間取図」の構成でまとめた資料です。

京町家の所有者・居住者の方に、自らの京町家の価値を理解していただき、今後の維持・管理・継承に役立てられることを期待しています。
※詳細は当センターまで

今回は、二条城の北にある町家を購入・再生し、町家暮らしを始められた宮岡家のご紹介です。ご夫婦にお話をお聞きますと、奥様は元々町家が好きということだったので、改修が進んでいくにあたって、ご主人の方が町家を好きになられたようにも感じました。

文＝中島宏典

町家購入のきっかけ

はじめから町家探しをしていたわけではないのですが、娘のステンドグラス工房用の小さな家を探してネットであれこれ見ていたところ、ある不動産屋のホームページで目に留まったことから、この建物との関わりが始まりました。

「明治に建てられた町家」というコメントがあり、写真でみると、外観は町家の雰囲気のまま新しく直された様子でした。元々、町家が好きで憧れもあったので、気になり内覧したところ、将来、娘が工房としても活用できること、立地条件も良いこともあって購入を決めました。井戸は床の下に隠されていました。埋められてないことや、石仏や古い看板が残されており、この家の歴史を感じられることも魅力でした。

その後、京都市景観・まちづくりセンターに相談し、専門相談員と現地で話しましたが、「建物内部は現代的に改装されているものの、このままでも十分に「住宅」として使える」ということでした。

ただ、「せっかく町家に住まうのだから、町家本来の良さを再生しよう」と決意し、改修に向けて動き出しました。

改修の経緯

まずは、設計士さんと幾度も打合せをし、現場の調査を重ねて、具体的な計画を練っていきました。手を入れる箇所をどうするか、というのがメインのテーマだったと思います。町家関係の本を買って読んだり、実際に町家見学に行ったりして、勉強もしました。

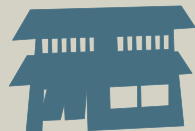
大幅な改修をすることによって生じる予算は、大変気になる部分でしたが、「今しかない」という気持ちで、行動を後押ししてくれたように思います。そして、設計士さんとのやり取りがスムーズに進んだことに尽きると感じています。やり取りの中では、言うべきことは言ってくれ、できないものはできないとはっきり言ってもらえたことで、素直にお互いが信頼できる関係ができました。「楽しみながら進められた」ことが大きかったですね。

2013年の夏に、いよいよ解体が始まり、合板などによって隠れていた本来の構造が「ドーン」と見えた時は感動しました。

改修中の現場には、週に1回しか行けなかったのですが、現場の進み具合を見るのは毎回の楽しみでもあり、安心

できました。

また、改修中に、地域にお住まいのおじいさんから、「綺麗にさせていただいてうれしい」という言葉をいただきました。喜びを共有できることは、幸せを感じるものです。



今後について



改修後の2階和室

まだ、引っ越して間もないので、整理しながら手を付けていくという感じです。「住まう」ことを始めて感じるのは、この建物の持つポテンシャルの高さです。じっくりと味わいながら、今後も一緒に進んでいきたいと思っています。

写真：宮岡氏

私と京都

京都大学名誉教授
青山 吉隆



「審議会を通して見てきた京都」

「日本に、京都があってよかった。」とポスターに書けるような都市は世界にいくつあるのだろうか。京都で都市計画の研究ができるのは幸運なことだった。現実の課題を、これまで多くの審議会などで体験させていただいている。特に京都市都市計画審議会会長の6年間は、まちづくりに対する市民の強い意志を感じていた。

都心部のまちなみ保全・再生に係る審議会では、町家、文化財、コミュニティ、景観など、貴重な京都都心部のあり方を総合的に考えることができた。これが町家政策や景観政策に発展し、その後、研究者と共同で職住共存の本^{*1}を出版することにつながった。

新景観政策が京都に必要なことは明らかだったが、市民の私権を制限し、不動産市場に少なからぬ悪影響を及ぼすと危惧されていた。しかし比較的短期間で合意形成ができたことは良い意味で意外だった。景観の形成は長期的に見ていく必要がある。その後、この政策の事後評価検討会で検証システムを提言し、市が景観白書^{*2}を毎年発行する仕組みができた。

公共交通優先の政策の一環として、京都市内のLRT^{*3}整備計画を提言する検討会に係わったが、これは結局合意形成には至らなかった。日本でのLRT整備の合意形成は難航している。そこで、LRTによるまちづくりや合意形成のあり方を研究するために、国から助成金を得て研究チームを組織し、先進地フランスでLRTの実態調査を行った。

今、気がかりなのは京都市の人口が他都市と同様に、緩やかに減少し始めていることである。すでに市街地は拡大し、建物は高層化しているから、3次元に伸びきった市街地から今後人口が消滅していき、この傾向は加速するだろう。このまま放置すると、無秩序に空き家、空き地が、市街地を蝕むという逆都市化が起きる心配がある。

だが逆に、市民一人当たりの可住地面積は広がる計算になる。この狭い日本で、はじめて都市の土地が余るかもしれないのだ。長い年月は必要だが、土地の統合集約ができれば、ゆとりのある都市空間を創ることもできる。あえて災害リスクの大きい地区に住む必要はないし、景観を阻害する建造物は消去することもできる。今、そうしたコンパクトなまちづくりに関する検討に係わっているところである。人口減少や高齢化が都市の衰退を必ず引き起こすとは限らないはず、これからの政策次第である。

その他にも、多くの審議会、研究会などで有意義な経験をさせていただき感謝している。



ストラスブルクのトラム(LRT) 写真:青山 吉隆氏

*1 職住共存の本 「職住共存の都心再生」学芸出版社、2002年

*2 景観白書 京都市ホームページ参照

*3 LRT 次世代型路面電車 富山市で平成18年から開業している

スタッフのつぶやき M.A

友人とピアノの連弾にチャレンジしました。私の出す音に友人の奏でる音が重なって、より厚みのある音が響くのはとても心地よいものです。お互いの音を聴きながらテンポを合わせて1つのメロディにするのですが、1人で練習している時とは弾き方が変わるような気がします。

即興でバンド演奏をするジャズミュージシャンは、ライブ中にお互いの音を聴き、自分の中で鳴っている音がお互いに影響されながら音楽をつくっていくそうです。そこには調和するようにあらかじめ作られた音楽とは違う、バンドメンバーや聴衆とも一体となった緊張感があるようです。そういう時間に参加だけでも楽しい!聴衆にも実は参加できる部分があるのです。それは、即興に共感できたら掛け声や拍手を送ること。掛け声は上級者向けなので、まずは拍手から参加したいと思います。

